
ハイスクールデイズ2 <一番欲しいもの>

兼高由季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールデイズ2 <一番欲しいもの>

【Nコード】

N8668D

【作者名】

兼高由季

【あらすじ】

伊集院正隆と山田モモ。不器用な二人の不器用な恋を応援するちよつと軟派な男の子、三条智明の視点でお送りする、二人のハイスクールデイズとその後日談。

1. 完全無欠の王子様

俺の名前は三条智明。

いちおうは公家の末裔だが、芸術家気質の祖父が売れない画家になり、その血を引いた父が売れない小説家になったために、身代を持ち崩しつつ、辛うじて体裁を保っているというありさまだ。

遠い親戚にあたる伊集院家はその逆で、六十代半ばの現当主は、日本を代表するISグループのCEO。彼がくしゃみをすれば日本経済が風邪をひくとされている経済界の大物だ。

そしてその息子はISグループの基幹企業である商社会社の社長。さらにはその息子、俺と同じ年の正隆は、彼を遠巻きに見ている女たちに言わせると、完全無欠の王子様なのだそうだ。

「うちは、あなただけが頼りなんだから……」

正隆と仲良くしろと母は言う。おっとりとした父と違って野心的な彼女は、俺が正隆に取り入って、三条家の安泰をはかることを心から望んでいるようだ。

名家の子弟が通う名門私立高校に入学させる方針をあっさりと転換させたのも、正隆が公立高校に進学するという情報をいち早く入手したからだ。

「人の上に立つ者は、すべからず庶民の暮らし向きを知っておくべし」

金持ちとのコネクションを重視するうちと違い、三条家の家訓には王者の風格がある。

俺は自分が他人に劣るとは少しも思わないが、子供の頃から帝王学を学んできた正隆は、確かに別次元の人間だ。

幼い頃から剣道をやっていたせいか、すばらしく姿勢が良い。
身長はほとんど同じはずなのに、向かい合って立っていると、何となく見下ろされている気がするのはそのせいだ。

輝かしいバックグラウンドと、「東大予備校」と皮肉を込めて呼ばれるエリート校にトップで合格する優秀な頭脳。

涼しい切れ長の目を眼鏡で隠し、クセのない黒髪を風になびかせて颯爽と歩く様は、人目を引きまくっている。

（嫌味な奴だ）

心の中で呟きながら、幼い頃から正隆のそばにいた。
たった一人の息子にかける母親の期待を裏切れない俺は、我ながらかなりの孝行息子だ。

そして運命の入学式の日。完全無欠の王子様は、生まれて初めての恋をした。

相手は貧乏なマッチ売りの少女、もとい、家計を助けるために懸命にバイトに励む健気な女の子。

名前を山田モモという。

2. 王子様の恋

入学式の開始を伝えるアナウンスが聞こえても、正隆はその場から動かなかった。

じっと見つめるその先には、一人の女の子が所在なげに立っている。

その瞬間、俺は心の中で、ビデオカメラを回し始めた。

校庭を彩る桜の木々がいきおいよく花を散らす中、セーラー服姿の女の子は、少し泣きそうな顔をして、じっと正門を見つめている。

おかつぱを少し長くしたような黒髪に、桜の花びらがヒラヒラと舞い落ちる。

色が抜けるように白く、華奢な手足はすらりと長く、木漏れ日のスポットライトを浴びて佇む姿は、日本人形のように可憐だった。

<入学式を始めますので、関係者は講堂の中にお入り下さい>

ダメ押しのように一際大きく響いたアナウンスにはっとして我に返った時、不安げだった少女の顔が花開くような笑顔になった。

正門の方から黒いスーツの胸にコサージュを付けた女性が駆けてくる。

二人が仲良く、講堂へ向かうのを見届けて、俺はほっと吐息をついた。

「正隆、俺たちも……」

講堂へ行こうと言うより早く、正隆が身を翻して駆け出した。

後で聞いた所によれば、女の子を追いかけて講堂に駆け込んだ正隆は、すぐに彼女を見失い、大勢の生徒に押されるようにして前に進むうち、俺が講堂に入った直後に目の当たりにしたあの光景を現出させ、一目ぼれの彼女とのドラマチック(?)な再会を果たしたわけだ。

あの正隆が、上履きのかかを踏んづけられて転ぶなんて！
しかもその相手は……。

腰が抜けたように膝を付いている少女を見て、さすがの俺も咄然と
なった。

しかも彼女の手の中には、さっきまで正隆がかけていた眼鏡がおさ
まっている。

「お前……」

何か言いかけた相手を無視して、少女は眼鏡を差し出した。

片方のレンズは完全に抜け落ち、もう片方のレンズにヒビが入って
しまったその眼鏡を、正隆が困惑顔で受け取ると、「ごめんなさい、
ごめんなさい」と謝罪の言葉を繰り返して、入学式の開始を告げる教
師の声に救われたように、回れ右して駆け去ってしまった。

後に残された正隆は、茫然と少女の後姿を見つめている。

一目ぼれした女の子の前で、みっともなく転んでしまった奴のダメ
ージは計り知れない。

おもしろすぎる展開に、俺は思わず噴き出してしまった。

新人生代表として壇上に立った時、正隆は壊れた眼鏡をかけていた。
答辞のスピーチは完璧に暗記しているが、眼鏡をかけていなければ、
わずか数段の階段につまずいて、さらなる失態を演じてしまう危険
があるからだ。

「山田モモです。よろしくお願いします」

聞き覚えのある声を耳にして、俺はぎょっと振り返った。

正隆に向かって「ごめんなさい」を連発していた日本の美少女が、
俺の真後ろに立って頭を下げている。

思いも寄らぬ展開に、俺は心の中でほくそ笑んだ。

正隆のこれからの出方次第では、おもしろいゲームが楽しめそうだ。

「モモちゃんって言うの？ 可愛い名前だね」

たらしの本領を発揮して、甘ったるく微笑みかけると、山田モモはこぼれそうに大きな目を見開いた。

（化粧つけゼロだから、この長いまつげは本物なんだろうな）

そんな下らないことを考えながら、俺は笑みを深くして、自分の名を口にした。

「トモって呼んでね」

最後にそう添えると、こくりと素直に頷いた。

こういうアップローチには慣れていないのか、白い頬がほんのりとピンク色に染まっている。

純情可憐という言葉がぴったりな女の子。

今まで付き合った子たちとはだいぶ違うけど、こんなタイプも悪くない。

（この子をゲットして正隆の鼻をあかすか、それとも仲を取り持つてやって恩を着せるか）

究極の選択に頭を痛めているうちに、初日のオリエンテーションは終了し、気がつくと、俺は女の子たちに取り囲まれていた。

「私もトモって呼んでいい？」

「ねえ、どこの中学校から来たの？」

質問攻めにあっているうちに、山田の姿は教室から消えていた。

がっかりして肩を落とした時、廊下が急に騒がしくなった。

クラス分けのプリントを握り締めたまま、廊下に立ち尽くしていた

のは、正隆だった。

何をしているのかと訊ねると、すぐに答えが返ってきた。

「話をしたかっただけなのに……」

「誰と？」

「山田……モモ……」

苦悩に満ちた声をききながら、笑いの発作に襲われて、俺は両手で口をおさえた。

ここは十組で正隆は一組だ。

正隆が、あの正隆が、フロアどころか校舎が違ふこの場所に、山田モモと話をするためだけに現れたというのか。

（し、しかも、逃げられるとは！）

我慢の限界がきて、ゲラゲラ笑い出した俺の腕をつかんだ正隆は、必要以上に凜然とした面持ちで廊下をすたすたと歩き出した。

「あ、見て！」

「答辞の彼よ。えっと、名前は……」

「伊集院よ。伊集院正隆君！」

俺なら手を振る所だが、女たちの黄色い声を完全にスルーした正隆は、中庭まで来た所でようやく手を離れた。

「美少年が二人きりで、こんな所にいるのはまずいんじゃない？」

おどけて見せると、壊れた眼鏡の奥の冷たい目で睨まれた。

そうやって俺を黙らせておいてから、傍らのベンチに腰かけ、俺にも座れと合図した。

「話をしようと思ったら、少しだけ時間をくれと言われたんだ」
「どういう意味だろうと首を傾げられ、俺も一緒に首をかしげた。

「意味はわかんないけど、時間をくれて言うのなら、そうしてや

れば？」

「できない」

「どうして？」

「……わからない」

足を組みなおした俺は、つくづくと相手の顔を覗きこんだ。

「それは恋だな。ひと目ぼれてやつだ」

「まさか！」と叫んだ相手に、「とにかく気が済むまで追いかけてみれば？」と軽い調子で告げてから、俺はベンチから立ち上がり、踊るような足取りでその場を後にした。

3. おいかけっこ

正隆は本当に山田モモを追いかけて始めた。

完璧だと思った男の意外なほどの不器用さに、俺はつくづくあきれたが、山田モモが正隆から逃げ回る様を見るのは痛快だった。

「どうして、正隆から逃げ回っているの？」

後ろを向いて訊ねると、困ったように眉根を寄せた。

「ね、モモちゃんの好きなタイプは？」

重ねて問えば、ますます困ったような顔になる。

「……あのね……」

と口ごもりながら教えてくれたことは、世間知らずの俺に少なからぬ衝撃を与えるものだった。

モモの家が母子家庭だということは何となく知っていたが、母親が病弱で、モモがバイトをしないと学校の授業料さえ払えないほど貧乏だとは、夢にも思わなかった。

そう言えば、入学以来、彼女の成績は下がりっぱなしだ。

授業中に背後から寝息が聞こえてきたりして、真面目そうに見えるわりには、遊んでいるのかなと思ったこともある。

「私、可愛くないし、成績も悪いし、全然もてないし……」

そこまで言った所で、モモは怯えた表情で立ち上がり、荷物を両手で抱え上げた。

「どうしたの？」

「バイトがあるから、もう行くね。話を聞いてくれてありがとう」
あわてて伸ばした手をすり抜けて、モモは小さく微笑んだ。

そのままくると背を向けて、逃げるような勢いで教室から出て行

った。

逃げるようなではなく、本当に逃げたのだと気付いたのは、その直後だった。

何気なく振り返ると、正隆が暗い顔をして立っていた。

「何でそんなに親しいんだ？」

「同じクラスだからじゃないか？ 席も前後ろだし……それより、

お前、本人の知らない所で陰湿な裏工作をするのはやめろよ」

「陰湿な裏工作？」

中庭のベンチに腰掛けたまま、正隆が不本意そうに眼鏡のブリッチを持ち上げたので、そのしぐさに対抗するように、俺は髪をかきあげた。

「山田モモに告白しようとした他校の男子生徒が半殺しの目にあって、病院に運ばれたなんて噂がまことしやかに流れている。山田に片思いの男が、山田に近づくやつをボコボコにして回っているなんて、お前らしからぬ低レベルのシナリオだ。他の男を寄せ付けたくないのなら、自分の名前を出せばいい。伊集院正隆が相手だと知れば、誰も近づきやしないさ」

「それは光栄だ」

皮肉な口調で呟いて、正隆は空を仰ぎ見た。

端正な横顔が、いつになく憂いを帯びている。

最初はおもしろがって見ていた俺も、だんだんと重苦しい気持ちになってきていた。

山田モモは確かに可愛いが、逃げる相手を追いかけるなんて、この男には似合わない。

五月に実施された中間考査はパーフェクト。

部活に入っていないくせに、野球、剣道、サッカー、陸上、テニスなど、試合があるたびに借り出され、驚くような好成績をあげている。

今や正隆は女生徒の憧れのまどだ。

もつと言えば、全校生徒の羨望と、全教師の期待を一身に背負ったまま、顔色一つ変えずにトップにあり続けることのできる天才だ。それが、なぜ……。

「もう、やめてしまえよ」

いやだというように正隆は首を横に振り、力なく微笑んだ。

「山田が俺から逃げ回っていた理由がわかった。壊した眼鏡の弁償代が払えないらしい。そのことをすごく気にしていて、少しずつでも払うから金額を教えて欲しいと言われて……俺は……」

正隆は額に手を当てて俯いた。

「俺の彼女になれば、弁償は帳消しにしてやると……」

「そんなことを言ったのか？　それで、彼女は？」

「絶対にいやだって……」

「は、ははははっ、一刀両断だ！」

笑いながら、俯く正隆の肩を抱き寄せた。

何をとっても完璧な男が、一人の平凡な女の子にこれほど振り回されるなんて！

「そうか、わかったよ、俺はお前に協力するよ。そうだな、まずは手始めに……」

日日新聞をとるようにと告げると、正隆は妙な顔をしたが、そのわけを告げると顔色を変えた。

自分の同級生が、しかも自分の好きな女の子が、毎朝新聞配達をしているなんて信じられないと言うのだが。

「嘘だろ？」

「嘘だと思ふなら、騙されたと思って、門の前に立っているよ」
冗談っぽくウインクすると、正隆は深刻な表情でうなずいた。

4. 初恋は実らず

二人の関係が、その後、どうなったのかは、よくわからない。

ただ、それからしばらくして、山田モモは公的機関の奨学金を申請して認められ、バイト地獄から抜け出した。

季節はずれの奨学金。

山田はもちろん知らないし、正隆も絶対に言わないだろう。

だが、正隆が裏で手を回したことが、俺にはわかる。

高校に入学した時、正隆はすでにIT関連の会社を経営していたから、自分のポケットマネーで山田母子を養うぐらい、本当は造作もないことなのだ。

だが、今の正隆はそんなことはない。

山田を尊重し、山田と対等であろうと努力している。

一年の秋に正隆は生徒会の副会長になった。

そしてその翌年には、全校生徒の圧倒的な支持を得て、生徒会長に就任した。

俺は六組、山田モモは七組、正隆は相変わらず一組で、俺は複数の女の子と付き合ったり分かれたり、気まぐれに美術展に出した絵が大きな賞をとってマスコミで騒がれたり、まあ、それなりに忙しくて、二人に関わることも少なくなつた。

ただ、生徒会の仕事で忙しい正隆が、どう時間をやりくりしたものか、文化祭後のキャンプファイヤーに姿を見せた時は驚いた。

火を囲んでフォークダンスを踊るというたわいないイベントが、正隆の登場で異常な盛り上がりを見せ始めた。

何気ないそぶりでダンスの輪に加わった正隆は、その先にいる山田

モモと自分との間にいる人数を正確に数えていたはずだ。最後の曲の最後のパートナーは山田になるはずだった。ところが、間に女子が次々と加わって、正隆の目算を狂わせてしまった。

曲がラストに近づいていく。

少し離れた所から見るとはなしに見ていた俺は、その瞬間、無意識に声をあげていた。差し伸ばされた手をすり抜けた正隆は、そのまま何人もの人間を追い超して、山田モモの手を取ったのだ。

その真剣な顔を見た時、俺は意味もなく泣きたくなった。

（山田モモ、振り向いてやってくれ）

それから幾度となく心の中で念じたが、二人が寄り添う姿を見ることは、ついにできなかった。

卒業式の日、俺は後輩から受け取った大量の贈り物の中から、山田モモに似合いそうなピンクの花束を選んで差し出した。

「正隆から聞いた。あいつさ、長いこと自己嫌悪に陥っていたけど、そんなにひどいことをされたと思う？」

山田は無言で首を横に振る。その目は少しだけ潤んでいた。

正隆は少しずつ距離を埋めようとしていたが、山田の態度はよそよそしいままだった。

正隆はしば抜けて優秀な男だが、それでも十代の高校生に過ぎない。ある時、山田を屋上に連れ出して、自分の思いをぶつけた上、強引にキスをした。

その後の展開は目も当てられない。

気を失った山田を抱きかかえた正隆が、真っ青になって保健室に駆け込んだというニュースは、放課後だったにも関わらず、瞬く間に校内を駆け抜けた。

「あの時はおもしろかったな。貧乏を苦に自殺しようとしていた所を思いとどまらせたとか、死者の霊に引きずられて屋上から落ちそうになっていた所を正隆が救助したとか、あり得ない話がまことしやかに伝わって……」

「でも、それで良かったと思うよ」

理由を訊ねると、山田は寂しそうに微笑んだ。

「だって、あの人は、みんなの王子様だもん」

（みんなの王子様？ でも、正隆は……）

バイバイと手を振って背を向けた山田に、気がつくとすがりつくように声をかけていた。

「確かにあいつは、嫌味なぐらい優秀だけど、モモチちゃんの前でだけはそうじゃなかった！ この三年間、正隆はモモチちゃんだけを見ていたんだ。頼むから、お願いだから……最後の最後ぐらいは、あいつを避けないでやってくれ！」

振り返った山田は不思議そうな顔をしていたが、それでも小さく頷いた。

そして再び、前に向き直った時、彼女の目の前には正隆が立っていた。

「山田、卒業、おめでとう」

卒業証書を手に凜と佇む姿は、男の目から見てもきれいだっただ。

優しい眼差しも唇に浮かべた微笑も山田モモ一人のため。

それなのに、どうして彼女は、これほどの男を拒否し続けることができたのだろう。

「伊集院君、卒業、おめでとう」

華奢な背中越しに聞こえてきた声は震えていた。

（山田……泣いているのか？）

本当は、この二人は両思いだったんじゃないだろうか。

一瞬だけ浮かんだ思いは春の風に、吹き飛ばされた。

俺の視線に気付くことなく、正隆はこの上なく爽やかな笑顔で山田に頷いてみせてから、卒業証書を握った手を持ち上げた。

5. 進路

東大文学部か、東京芸大の美術学部か、さんざん迷った挙句、消しゴムの両面に二つの進路を書いて空にほうった俺は、消しゴミの神のお導きに従って東大文学部への進学を決意した。

「お父様の二の舞になるつもり？」

「じゃあ、芸大にしようか？」

「それじゃあ、おじいさまの二の舞だわ！」

母は泣きまねまでして俺を止めようとしたが、暇つぶしに書いた小説がライトノベルのコンテストで賞を取り、百万円が転がり込んだこともあり、ベストセラー作家になることを条件に、文学部進学を許された。

東大の経済学部に進むと思われていた正隆は、土壇場になって法学部に進路を変えていた。

「このままでは国が滅びる」の一言に、厳格な伊集院家の当主が手を打って喜んだという。

今では「直系の孫が総理大臣になるのも悪くない」などと言っているそうだが、それを聞いて、冗談だと笑い飛ばすことができない所が恐ろしい。

正隆がその気になれば、総理大臣だろうが、アメリカ大統領だろうが、なれないことはない気がするのだ。

受験勉強から解放された俺は、お気楽な大学生活を送っている。対する正隆は、群がる女たちには見向きもせず、ひたすら勉学に励んでいる。

（昔はもっと可愛げがあったのに）

ほんの数ヶ月前の高校時代を懐かしく思い出しながら、俺は正隆のマンションで、ぼんやりと主が帰るのを待っていた。

大学入学と同時に正隆は家を出た。

「若い頃の苦労は買ってでもさせろ」という祖父の言葉に従ったというが、ハウスキーピング付きの最新マンションで、どんな苦労が買えるのか？

かくいう俺は相変わらず窮屈な実家住まい。

「正隆の家に行く」と言えば、家の者は何も言わないから、彼女の部屋に泊まった時のアリバイ作りなどにも協力してもらっているが、こんな風にふらりと立ち寄ることも少くない。

子供の頃は正隆のことが嫌いだった。

弱点のない、嫌味な奴だと思っていた。

だが、高校時代の三年間が、俺の正隆に対する評価を一変させていた。

俺はあの頃の、情けなくもみつともない正隆に、密かな親愛の情を抱いている。

あの頃の正隆にもう一度会いたくて、強引に女の子を紹介したほどだ。

「俺の後輩なんだけど、滅茶苦茶可愛いだろ？ 本当にお前のことが好きなんだ。頼む！ 社会勉強だと思って、付き合ってやってくれ！」

そんな風に頭を下げながら、嫌がる正隆を強引にデートに送り出すんだけど、なぜか、うまくいかない。

積極的な子は、初回のデートで正隆を押し倒したりもするけど、それでもやっぱり正隆にあっさりと振られてしまう。

（あれだけのルックスなんだから、その気になれば女なんて入れ食いなのに）

「妙な奴だ」と呟いて、小難しい本がずらりと並んだ書棚に目をやった。

その日の俺は少しだけどうかしていたと思う。

いかがわしい雑誌か、アダルトDVDの類を見つけ出して、何となく正隆も普通の人間だということを確認したかったにすぎないが、家捜しの結果、出てきたものは、予想だにしないものだった。

6. 忘れられない

高校時代に正隆が愛用していたスケジュール帳が、きっちり三冊、机の引き出しの一番上に納まっていた。

何気なく手に取って、無造作にページをめくった俺は、ぎょっとした。

カレンダー状のワクの中に、その日の予定を書き込んであるのは普通だが、それと一緒に奇妙なマークが付されている。

相撲の星取表のようでもあるし、天気記号に似ていなくもない。

一年と二年の途中までは多彩なマークがひしめいている。でも、三年にいたっては、●と△のオンパレードだ。

不可解な思いを抱きつつも、ゆっくりとページをめくっていく。

体育祭、修学旅行、文化祭……一枚めくるごとに、こみあげる懐かしさで胸が一杯になり、気がつけば、時が経つのを忘れていた。

手帳の書き込みは卒業式の日で終わっていた。

その日の情景を思い出し、そこに付された◎を見た時、そのマークの持つ意味が、まるで天啓でも得たように理解できた。

会えなかった日は●、目が合った日は○、そして、言葉を交わした日は……。

「不器用な奴。これじゃあ、ストーリーだ」

ぼそりと呟き、手帳の端々に記された文字を穴の開くほど見つめた俺は、さらに机の中を引っ掻き回して、一枚の封筒と二枚の便箋を取り出した。

一目ぼれなんて、ばかげている。

ずっと、そう思っていた。

でも、入学式の朝、桜の木の下に佇む姿に

見とれていたことは、まぎれもない事実だ。

講堂に入ってから、僕はあなたを探していた。

だから大勢の目の前で失態を演じたことを恥じる気持ちより、あなたとの接点ができたことを喜ぶ気持ちの方が大きかった。

あなたは僕から逃げ回っていたけど、

僕はかなり姑息な手段を使って、

あなたに近づこうとする男たちをブロックし続けた。

誰にも触れさせない。

あなたを守ることがするのは僕だけだ。

けれども僕の思いは空回りを続け、

守るどころか、

傷つけることしかできなかった。

どんな逆境にもあなたは負けない。

あなたは僕を必要としない。

だから僕は諦めた。

少なくとも諦めたつもりだった。

大学に進学して、何人かと付き合って、

それでもあなたのことばかり考えている自分に、

正直、嫌気がさしている。

高校生活を振り返った時、

思い浮かぶのはあなたのことばかりだ。

同封したものは、ただ、追いかけることしか

できなかった、みっともなくも懐かしい日々の軌跡。

僕のことなど、さっさと忘れてしまいたければ、煮るなど、焼くなど、ご自由に。

でも、もしも、そうでないのなら……。

一気呵成にそこまで書き上げた所で、玄関で物音がした。

書きかけの手紙と、三冊の手帳をすばやく鞆に突っ込んだ俺は、あわただしく周囲を片づけ始めた。

「智明、来てたのか？」

俺はそうだと言う代わりに、ひらひらと手を振った。

シンプルなデザインのジャケットには超有名ブランドのタグがついているに違いない。

高級品を当然のように着こなす男は、靴を脱ぐしぐささえ、きまっている。

「もうすぐ誕生日だろ？ お前が一番欲しいものをプレゼントしようと思っさ」

情報収集に来たと告げると、正隆はふっと微笑んだ。

「欲しいものなんかないな」

「本当に？」

当たり前だと言わんばかりに、自信家の男は頷いた。

「欲しければ、自分で手に入れればいい」

「へえ、じゃあ、もしも俺がお前の一番欲しいものをプレゼントしたら、どうする？」

「どうするもこうするも、そんなものないけど……」

そうだな……と呟いて、正隆は視線を宙にさまよわせた。

「その時は、今度は俺がお前の一番欲しいものを贈り返してやるよ」

「OK、忘れるな」

はやる気持ちで立ち上がると、夕飯を食っていけと引き止められた。あの三年間はやっぱり存在していたのだと、くすぐったい思いで頷いた。

母親の意向とは関係なく、俺と正隆はいつの間にか、本当の友人になっっていた。

高級食材をふんだんに使う分、正隆の作る料理はシンプルだ。

チリメンジャコとカラスミのスパゲティに、キャビアを散りばめたサーモンサラダ。

帝国ホテルのポタージュスープに、バゲットと高級ワイン。

（こんなものを日々食っている大学生がどこにいる？）

しかも俺たち未成年だぞ！

そんな突っ込みを心の中で入れながら、それでも優雅な食事を楽しんだ俺は、初志貫徹とばかりに夜闇の中に飛び出した。

7. ハッピーバースデー

（山田モモは、今、どこにいるのだろうか？）

携帯を取り出し、高校時代の女友達の名前を次々と表示させながら、三年の時、山田と同じクラスだった子に電話をかけてみた。

そしてのけ反るほどに驚いた。

母親が再婚したために、山田の姓は山口に変わっていた。

その上、今は広島県の県立大学に通っているという。

正隆の誕生日は明後日だ。これではどうにもならないと思いつつ、書きかけの手紙を取り出した俺は、最後の行にこう記した。

「もしも、そうでないのなら、今度はあなたが、僕に会いに来て欲しい」

その足で近所のコンビニに向かい、さっき電話で聞きだした住所に三冊の手帳と一緒に宅急便で送る手配をした。

（ああ、飯を食ったのは失敗だった）

そのまままっすぐ外に出ていけば、今日の便にのせられたかも知れない。

仕方ないなと呟いて、ふと見上げれば一面の星が瞬いていた。

この空は広島に続いている。

正隆の字に限りなく似せて書いたラブレターは、山田モモの心に届くだろうか。

手紙を書いたのは本人ではないが、山田モモのことに関する限り、俺には正隆の気持ちが手に取るようにわかるのだ。

あれは愛だ。

限りなくしつこく純粋な愛だ。

あいつの愛を受け取る資格を持つのは、山田、いや、山口モモただ一人だ。

翌々日の夜、携帯のアドレスに飛び込んできたメッセージを見て、俺は胸が熱くなった。

宅急便の伝票に記した電話番号はでたらめだったが、手紙に記したアドレスは俺の携帯のものだ。

＜広島発19時57分。東京着23時45分＞

たったそれだけの短いメッセージ。

震える指先を叱咤して、俺は返信メールを送信した。

第三者に過ぎない俺がごちゃごちゃしたメッセージを送るのは無粋だから、「ホームで待っている」とだけ入力して送ると、「はい」というこれまた短い言葉が返ってきた。

それからの俺は大変だった。

正隆のマンションに行ってみるともぬけの殻だった。

「若者のくせに誕生日の夜に家にいないでどうするつもりだ！」

誕生日の夜をたった一人のマンションですごす方が、よっぽど若者らしくないと思うが、動転している俺は、冷静な判断力を失っていた。

（とにかく正隆を捕まえなければ。捕まえて、首に縄をつけてでも東京駅の18番ホームに連れていかなくては……）

正隆の携帯に何度も電話をしてみたが、「電源を切っているか、電波の届かない所に……」という不毛なメッセージが流れるばかり。

正隆が現れそうな場所に片っ端から電話をかけて、電話がなさそう

な場所は自ら足を運び、へとへとになりながら時計を流し見た俺は凍り付いてしまった。

「伊集院正隆、ばかやろう！ 出て来い！」

正隆のマンションのまん前で大声を張り上げた時、硬いもので後頭部を殴られた。

涙目で振り返った俺は狂喜した。

目の前には買物袋を手にした正隆が不機嫌な面持ちで立っていた。

「さあ、行くぞ！」

「は？」とらしくない間抜けな声をあげた相手を完全に無視して、素通りしかけたタクシーを呼び戻した。

「東京駅へ！ 急いで下さい！」

「何で東京駅なんだ？ こんな時間に駅なんかは何の用が……」
どこまでも平然としている相手もどかしくて、俺は正隆の胸ぐらを掴んでいた。

「プレゼントだよ！ 俺はもう何年も前から、お前にプレゼントを贈りたかったんだ！」

「それは、嬉しいけど……お前、泣いているのか？」

（誰のために泣いていると思うんだ？）

困惑気味に声をかけられて、涙目で正隆を睨みつけた。

そうこうしている間にも、タクシーは風のように東京駅へと向かっていく。

「コンビニで買ったウーロンのペットボトル、袋ごとタクシーに置いてきた」

「そんなもの、俺が後で買ってやる！」

下らないやりとりをしながら、正隆を引きずるようにして階段を駆け上がり、もどかしい思いで入場切符を買った俺は、一枚だけのそれを正隆に押し付けた。

「ほらっ、プレゼント!」

「これが?」

真顔で首を傾げられて、俺はホームを指差した。

「そんなものがプレゼントのはずないだろ? お前が一番欲しいものはホームの上だ。広島発19時57分。東京着23時45分。山田モモ、もとい、山口モモが、お前に会いに来るんだよ!」

「……………」

一瞬だけ言葉を失った正隆は、バネのように駆け出した。

新幹線の到着を伝えるアナウンス。

今日最後の雑踏の中、人をかきわけ進んでいく正隆の背中を見送ってから、俺はその場にひざまずいた。

階段を下りてくる人ごみが途絶えても二人は降りて来なかった。

(ひょっとして、新幹線に乗り遅れたのか?)

急に不安になった俺は、仕方なく自分の分の入場券を購入し、怪訝な様子の駅員に一礼してホームに出た。

伊集院正隆と山田、いや、山口モモはそこにいた。

時が止まってしまったかのように、しっかりと抱きしめあったまま、彫像のように動かない。

(ハッピーバースデー、正隆。プレゼントを大事にしろよ)

心の中で祝福の言葉を述べ、声をかけようかどうか迷っている若い駅員の腕をつかんだ俺は、一足一足を踏みしめるようにして、ゆっ

くりとその場を後にした。

—了—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8668d/>

ハイスクールデイズ2 <一番欲しいもの>

2010年10月9日16時15分発行